個性：梁山泊

ルーニー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんか転生したら世界違うのに達人の方々がいたので弟子入りした。反省はしてないけど後悔はちょっとある。

目次

弟子2号 ―― 1
進路 ―― 6
新しい弟子 ―― 10
修行 ―― 16
気 ―― 19
組手 ―― 22

弟子2号

拝啓、お父様お母様。いかがお過ごしでしょうか。最近肌寒くなりつつあり、体調も崩しやすい季節になりつつあります。風邪などを引かぬよう、暖かくして過ごしていますでしょうか。

僕ですか？僕は今日も体を動かしています。

「ほらほらスピードが落ちてきてるよー！もっと早く足を動かすー！」

ハムスターが走る滑車のような装置の中で両手を前にしながら腰を落としてスタンガンのように電気が走っている棒に当たらないようにね！

「やめっ！死ぬ！これは死ぬー！」

「はっはっは。なに。死にはしないさ。せいぜい激痛が走る程度のものさ」

「鬼か！」

装置の横でにこやかな笑みを浮かべているのは和装がよく似合う細目なちょび髭のダンディな男性。さらにその後ろではこの地獄を肴にビールを飲んでいる強面の男性に胡坐をかいて座っているミニスカが鼻で笑えるほど丈の短い着物を着た片手に鎖分銅を持った美人さん、それをカメラで激写しようとして鎖分銅で撃退されかけている小さなおじさん、楽しそうに小鳥に餌を与えている褐色巨漢のお兄さん、そして懐かしそうな表情を浮かべている冴えない男性とそれに苦笑している金髪のキレイな女性が集合している。

「あっやば」

叫んだせいでリズムが崩れた。足がもつれてそれをなんとか戻そうとしてスピードが落ちてしまい

「ぎゃあああああああああああ！」

結果後ろの電撃装置に当たってしまい全身に激痛が走る。冷静に考えているけどこれマジで痛い。慣れてきたせいで頭の中では冷静に考えれてるようになってるのは喜ぶべきなのか悲しむべきなのか。

お父様、お母様。僕は師匠方に殺されるかもしれません。その時は

あなたたちのもとに向かいますのでどうか見守っていてください。
いやまぁおとんとおかんは死んでないけどさ。師匠たちは殺さないいい塩梅の状態で家に送るだけだと思うけどね。それでもこれはきつい。マジできつい。

さて。突然拷問、もとい修行を見せられた人はなんじゃこりゃと思うからとりあえずここに至るまでの経緯を説明しようと思う。
俺は、まぁいわゆる転生者だ。一部の界隈で人気のあるジャンルで、なんで俺は転生したのかと首をひねりたいが、なってしまったものはしょうがない。いや、いつ死んだのかを覚えていないし神様とやらも見た覚えがないからホントどうしてこうなったんだと今でもわからないけど現状不便でも何でもないから特に何も考えずに生きている。
それでどんな世界に転生したのかと言ったら、正直俺は知らない世界に来てしまった。いや、知らないわけじゃないんだ。ただ興味がなくて読んでなかった漫画の世界に来てしまったというのが正しいかもしれない。
場所は現代日本。ＳＦのようなすんごい技術があるわけじゃないけど、それでも近未来的に技術は進歩しているように思う。でもそれ以上にやばいと思うのが、世間一般的に『個性』と呼ばれている力だ。『個性』。普通に聞けば他の人との違う性格や癖のようなものを思い浮かべるかもしれないが、ここでは違う。文字通り巨大化したり電気出したり炎出したり姿が変わったりと、超常現象としか言えない力を人が持っていることを『個性』を持っているといわれている世界だ。『個性』。そう、『個性』だ。個性というより超能力だろと思わなくはないが、まぁ世界的には『個性』と呼ばれているから『個性』なんだろう。
ここまで言えばわかるだろう。そう。この世界は『僕のヒーローア

カデミア』の世界なのだ。正直詳しい内容は知らないし、知っていることもＣＭとかで流れていたものをおぼろげにしか覚えていないぐらいだが、大まかな概要や世界観はなんとなく覚えている。どこで設定とか見たのか覚えてないけど。確か映画化するってのをなんかで見た覚えがあるから人気があった作品なんだろう。

その時は中学高校の時期の漫画（ペン○ン娘やエア○ア等）や古い漫画（ハイ○クール奇面組やＧ○美神等）、あと個人的にはまっていた漫画（芸術科ア○トデザインクラスやあっちこっ○等）、あとドマイナーな漫画（ヒーローク○スラインやＸＥＮ○Ｎ等）を集めるのにはまっていたから最近の漫画事情はほとんど知らないのだ。おかげで周りと話が合わなかったのはいい思い出だ。

さて。それはそうとこの世界のことに話を戻そう。この世界は『個性』というものがある。最近だと少なくなりつつあるけど『個性』を持ってない『無個性』と呼ばれている人もいるけど、大体の人は何かしらの『個性』を持っているといってもいいだろう。もちろん俺も持っている。いや、厳密にいうと持っているというか常時発動しているというべきか。あまりにも特殊すぎるから『個性』と呼べるのか？と言われたこともあったけど、さすがにものがものだけに『個性』と呼ばざるをえないんじゃないのか？と思っている。

まぁ、察しがついている人はいるだろうから俺の個性の名前をとりあえず言おう。

俺の『個性』は『梁山泊』だ。

知らない人は、え？と思うだろう。物知りの人は中国の沼か、伝奇小説の水滸伝、はたまたお店の名前を思い浮かぶ人もいるかもしれない。

けど俺の『個性』はそういうものではない。俺の『個性』としての『梁山泊』は優れた人物が集まった場所、その中でも超人じみた身体能力を発揮する格闘家が集まっている集団を指している。

そう。俺の『個性』はかつて週刊誌のサンデーで連載していた漫画、史上最強の弟子ケンイチの梁山泊に所属している人たちを現実にする『個性』だったんだよ！（ナ、ナンダッテー!?

とはいっても、正直これが『個性』なのかと言われたら正直首をかしげるようなものだ。いくら世界が違うと言ってもあの人たちが俺の意志で消えることはないし、俺が意識を失おうがあの人たちがいなくなることはなかった。現に何度も気絶してもいなくなることがなかったから間違いない。

もしかしたら『個性』である理由が他にもあるんだろうけど、そこまで真面目に検証しているわけじゃないから現状わかっている範囲では大まかにいえばこれがすべてだ。まだ言えることがあるんだけど、まぁそこまで特筆する必要があるわけじゃないから問題ないだろう。

正直、なんで俺の『個性』がこうなったのかはさっぱりわからん。もしかしたら覚えてないだけで神様にお願いしてこうなったのかもしれないのだけど覚えてないから断定もできない。というか正直もらえるのなら横島の文珠が欲しかったけどないものをねだっても仕方ない。いやあれはぶっ壊れ性能だからあっちゃやばいけどさ。

まぁそれはともかくだ。細かい話は置いといて何をどうして現状どうなのかを端的に言うことにしよう。

梁山泊に弟子入りして弟子2号として日々を送ってます。

うん。知る人が知れば何十カラットのダイヤモンド以上の価値があることなんだけど、まぁ、その、なんだ。正直早まった感はあるよね。うん。

「ほーら。おいちゃん特製の漢方ね。死人も復活すること請負いね」

「なんだ、また気絶したのか。だらしねぇなぁ」

「あぱぱぱぱぱ。あの時のケンイチと同じぐらいには頑丈だから大丈夫よ」

「頑丈になったと思ってたんだけど…な」

「ふむ。想定以上に早く動かしていたから電圧が上がってたみたいだね」

「あぁ、僕もあの時期があったなぁ……」

「懐かしいですわね」

見る人がいれば感動するんだろう達人たちなんだろうけど、2人を

除いて地獄の鬼に見えてきたのは、果たして俺の見間違いなんだろうか。あとこの漢方めちゃくちゃまずい！これまずさで復活するって意味じゃないでしょうね師匠!?

「ふむ。今日も梁山泊は平和じゃな」

平和とは何かをぜひ辞書で調べてください長老ぉ！

進路

「うごごごご」
　朝の８時１５分。まだ教室にも人が少ない中で俺は疲労で机にくっつぷしていた。息は整ってはいるが足は歩くことで精一杯なほどに震えているほどと言えば今の辛さがわかるだろう。
　こうなった原因は単純明快。朝の６時から地獄の拷問もとい修行をしていたのだ。やったことは足腰とスタミナを鍛える修行。具体的に言うとタイヤとお地蔵さまを引き摺って全速力で市内を走るだけの単純なものだ。重さはヤバいけどな！
　成長期なんだからそこまでやっちゃまずいんじゃ？と思ったけど、どうも俺の体は人よりも成長が早く、小学6年生には前世以上の１８１ｃｍになっていたため特に問題はないだろうとのことだ。なんでこんな早いんだろうかと思っていたんだけど、この人よりも早い成長は自分の身長は前世のものだという思い込みからじゃないだろうかと岬越寺師匠は考えているみたいだ。病は気から、ならぬ体は意識から、ということなんだろうなぁと個人的に思ってる。
　まぁそのせいで成長痛がやばかったし通常よりも早くあの拷問じみた修行をやることになったんだからそれはそれでめちゃ辛いんだが。マジで死ねる。あの人たち活人拳の人たちだから死にはしないけど。いやアパチャイ師匠は割と死ぬ可能性あるわ。今のところ大丈夫だけど。
「また唸ってるけど大丈夫なのか？」
　足や体のダルさで机で唸っているとクラスメイトが苦笑しながら前の席に座った。黒髪にギザ歯のどこにでもいそうな感じの少年だが、漢気ということにこだわりがあるのか学校でのいじめとかカツアゲは絶対に許さない熱血漢だ。
　中学校に入ってしばらく経った時、その時は別のクラスだったけど体育祭でお互い話す機会があって、憧れている人が師匠たちに似てるせいか結構気が合ったのがきっかけで仲良くなった。
「大丈夫じゃない。動きたくない」

プルプルと震える手を挙げながらだるそうに返事するとあきれたような笑いをこらえているような、そんな感じで軽くため息を吐き出してきた。
「また叫びながら町中走り回ってただろ？今朝もタイヤの数とかお地蔵さまの数とかどれだけ増えてるんだろって面白がってる人もいたぞ？」
「見せもんじゃねぇぞこのやろう」
くそう。もう慣れたから恥ずかしいとかは感じてないけど、というか感じる暇もないってのが本当なんだけどさ。それでも第三者から言われるとなんか恥ずかしいな。やめないけど。やめれないけど。
「いつも思うけど、よくあんなもの引きずってあのスピードで走れるな。何キロあるんだあれ？」
「何キロだっけ。たぶん合計したら１００は越えてると思うけど、詳しい重さは怖くて聞けてないわ」
「……お前すごいな」
ハハッ。もう慣れたよ本当に。
「そ、そういえば進路とかってもう決まってるのか？」
俺の表情を見て聞くんじゃなかったと思ったのか、少し慌てたように話題転換をする。もう中学3年生になって1か月が経ってるし、そろそろ進路相談とか始まる時期で少し前にクラスメイトがクラス中で進路を聞いているのを見ていた。とはいえ、お互いなんとなく進路が分かっていたから俺とこいつに関してはお互い聞くこともなかったけど、やっぱり聞きたかったのか。とは言っても、俺の目指すのはここしかない。
「雄英高校」
「やっぱお前も雄英か」
クラスメイトは予想通りか、と笑っているけどこういう反応もここじゃ珍しいことだったりする。
俺は『個性』らしい『個性』が表面化されてないし、体も『無個性』と何ら変わりないからよく『無個性』と蔑まれている。目の前のクラスメイトみたいに特に気にせずに接してくれる人もいるにはいるけ

ど、『個性』至上主義のような考えが浸透しているから俺の進路を聞いてバカにしてくるやつや別の道を考えるように勧める先生もいる。まぁ雄英高校といえば命の危険がある現場で働く職業を目指す専門高校のような場所だ。災害や人災による混沌とした現場では有能な『個性』があった方が確実性もあるし救助する側も現場に対する自信が出てくる。そんな中で『無個性』の人がいても足を引っ張る可能性が大きい以上、仮に雄英高校に入学できて資格も手に入れれたとしてもその人を欲する事務所はほぼないだろう。

だけど。だけどだ。まだ免許皆伝もしていない身とはいえ仮にも梁山泊の弟子、一端の活人拳なんだ。俺の憧れの人たちは、その中でも特に尊敬する人は才能がないのに目標のために必死に頑張って強敵を倒し続けて、いろんな人を助けてきた。そんな姿を知っている身として、あんな風になりたいと思っているからこそ、雄英高校はあの人に近づける第一歩になる。

師匠たちからは俺には才能があると言われている。ポテンシャルだけ言えば２０歳未満にもかかわらず妙手に至り、そして２０歳で達人に至った田中勤さんと同じかそれ以上だとすら言われている。でも、それに反するように心の方は安定していないと言われている。普通の学校ではダメだ。様々な経験を経ている人たちのいる雄英高校に入ることが、俺の糧になると信じている。

そんなことを思っていることを知っているのか、人の夢を否定することをしないのか。俺の進路を聞いてもお互い頑張ろうぜと言ってくれるのは気が楽だし、やる気も出る。やっぱり、いい奴と友達になるのは気持ちがいい。

「でもそんなので雄英高校に入学できるのか？あそこ難関だぞ？」

「成績はいいからそこで稼げる」

「なんであんなことやってて成績トップなんだお前」

クラスメイトがあきれるような表情で俺を見てくるが、あの環境にいたら否が応でもそうなるって。

まず岬越寺師匠が医術芸術工学物理数学文芸を修めてる性格以外完璧達人だから勉強にも力を入れないとまずいんだろ。あと逆鬼師

匠が英語得意でちょくちょく教えてくれるから俺がしゃべれるようになるの楽しみにしてるんだし、アパチャイ師匠もタイ語しゃべってくれないかなぁって目を輝かせてる、んで馬師匠もなんか中国語しゃべらないかなって楽しみにしてるからマジで勉強してないといろんな意味でプレッシャーなんだよ。

……高校卒業するぐらいになったらマルチリンガルになれるんじゃないかこれ。

なお学校が終わって梁山泊（今は亡きじいさんの家）に戻ったら例のごとく足腰の鍛錬とアパチャイ師匠の修行で本当に死にかけた。原作主人公ことケンイチさんのように本当に心拍停止はしなかったけど気絶はデフォルトである。

新しい弟子

段々と暖かくなってきている今日この頃。師匠たちは各々好きなことをしていた。ある人はビール瓶片手に競馬の予想をして、ある人は寄ってくる鳥たちにエサを与え、ある人は屋根の上でのんびりとしている。

平和だ。ここだけを見たらすごく平和なのは間違いない。俺もこんな平和な日にはゆったりとしたいと思う。でも、俺は声を大にして言いたい。今は決して平和なんかじゃないと。

「んぎゃあああああああ！」

両腕から電気を発してる木でできた人形が四方から襲い掛かってきてるのに平和だとか言えるわけねぇよな！

「ほらほら～。素早く打たないとビリビリしちゃうぞ～」

「いや、これ、前より、固い、てか重い！重くないこれ!?」

「そりゃ君も成長しているからね。ちゃんと鍛えられるように調整するのは当たり前のことじゃないか」

「ちくしょおおおおおおおお！」

今ほど自分に才能があることを恨んだことは、いや結構あるわ。今まで全部結構早く重くなってきててそのたびに思ってるわ。そのたび約1名が頬をひくつかせていたけど、俺は見なかったことにしている。あれは才能について複雑な気持ちになっていたんだろう。俺も複雑ですよコンチクショウ。

しかし、これがまた冗談抜きできつい。四方から起き上がってくる人形を全力で打ち抜く。しかもどんなふうに作ってるのか電気が走っている両腕が不規則に頭と腹を移動しているから瞬時に打ち込む場所を変えないといけない。死なないとはいえ電気に当たったらめちゃくちゃ痛いから必死になって打ち込む。いったいいつになったら終わるのだろうか。

「あぱ。ケンジにお客さんよ」

息も絶え絶えになりつつあったとき、アパチャイ師匠の声が玄関から聞こえてきた。

「え、俺？」
　いつもは師匠たちに用がある人がほとんどなのに、俺に客なんて珍しい。年に1回あるかどうかだ。というか俺に用がある人は学校で済ませられるか、家のほうに行ってもいないから帰るかの2つが大体だからわざわざここに来ること自体が稀だ。いったい誰がこんなところに来たんだ？
　そんなことを考えたせいだろう。一瞬自分の現状のことが頭から離れてしまった。
「いぎゃあああああああああああああ！」
　そしてお約束となりつつある電気が体を走る激痛に耐える作業へと変わっていったのだった。

「……なんか、焦げてねぇか？」
「……気にしないでくれ」
　服には若干の焦げ目があり、頭もチリチリとなっている。あの岬越寺師匠が作り上げたものだから死にはしないけど激痛は逃れられない。気絶する前にまた想定の出力を上回っていたとか聞こえたような気がしたけど、たぶん気のせいだろう。
　さて。数十秒の気絶からたたき起こされてお客さんがいる部屋に入ったんだけど、そこにいたのは俺と仲のいいクラスメイトだった。珍しい、というレベルじゃない。俺が常識外れの修業をしているのを知っている人はここに来ようとはしない。あんなものを知っていたらそらかかわろうとは思わないよね普通（震え声）。
「んで、なんでここに来たんだ？」
　思い出したくもないことは忘れるか話を逸らすに限る。とりあえず最初っから気になっていたここに来た理由を聞いてみることにした。
「……お前に、というよりここの人たちにお願いがあって来たんだ。お前の名前を出したらお前が呼ばれたんだ」
　ここの人たち？はて。ここの人たちというと師匠たちのことなんだろうけど、なんで師匠たちに用があるんだろうか。犬顔警部のよう

に依頼でもないだろうし、かといって整骨院や針治療が必要なほどのケガをしているようにも見えない。あと師匠たちに用事があるとしたら……。
「俺、ここの人に鍛えてもらいたいんだ」
「おいバカ死ぬ気かお前」
予想外なことを聞いてしまったせいで思わず本音がポロリと出てしまった。いや、マジかこいつ。よりによって自分から崖から落ちていくようなことをしようとしているのか。俺の死ぬ気かという言葉をどうとらえたのか、真剣みを帯びた表情を浮かべてひざの上に置いた手を強く握りしめ始めた。
「……俺ってさ、男気だなんだの言っておいて、結局情けねぇ奴なんだって、気づいたんだ」
真剣でありながらも苦々しい表情になりつつ語り始めたのは、昨日の帰り道で起きたことだった。
見た目が怖い人が同級生に事務所の場所を確認していたところ、何も言わなかった生徒たちにキレかけていた。本当ならそこで自分がかばうべきだったのに、怖くて足が動かなかった。結局別のクラスメイトがとっさに適当な場所を伝えたら立ち去って行った。
まるで懺悔をしているかのように、クラスメイトはとても悔しそうに告げていった。
「ビビってたんだ。怖がってたのに、俺が行かなくちゃって思ってたのに、ビビッて動けなかったんだ。今のままじゃダメなんだ」
自分の手を見つめ、力いっぱい握りしめる。同時に固いもの同士が擦れる音が辺りに響き、その音を鳴らしながらゆっくりと手を開いた。
「だから、俺のわかる範囲でやるべきことをやるって決めたんだ」
「んで、そのうちの1つが体を鍛えること、と」
「あぁ。そうだ」
真剣な表情を浮かべて俺の言葉に神妙にうなずく。
なるほど。確かに、体を鍛えるという結論に至ったのは間違いじゃないと思う。世間一般でいう勇気のある行動。恐怖に打ち勝って悪

に立ち向かうそれは、確かに勇気のある人じゃないと難しいだろう。
　けど、そんなことができる人は探せば腐るほど、とは言わないがそれなり以上にはいる。当然だ。世の中にはヒーローなんて役職があるぐらいには、そしてそれも飽和しつつある状態にある今、それなり以上には悪に立ち向かう意思はある人がいるということだ。
　けど、それが前述した勇気と一緒なのかと言われたらおそらく違うだろう。飽和しつつあるヒーロー職だが、はたしてこの中に力及ばずでも巨悪に立ち向かうことのできる人はどれだけいるのだろうか。自分の力を発揮できない、自分では敵わない相手が出たとき、果たして何人が立ち向かうことができるのだろうか。
　それができるからヒーローなんだろう。それができる人だから、尊敬と憧れを抱かれるんだろう。俺が師匠たちにあこがれたときと同じように。
「……言いたいことはわかった。確かに、心身を鍛えるのにここほど優れた場所はないと俺も思う」
「なら！」
「けど、弟子として鍛えるかどうかを決めるのは師匠たちの意思次第だから俺からは何とも……」
「話は聞かせてもらったぞい」
　突然俺の隣から尋常じゃない気配を感じた。
「長老!?」
　何の気配もなくいつの間にか俺とクラスメイトの間に立っていたのは年老いてなお巨木を連想させるほどの存在感を放つ老人、この御方を老人と言ってもいいのか疑問だが、梁山泊の長である、無敵超人風林寺隼人その人だった。
　いつの間にかいた巨漢に驚いたのか俺以上の反応を見せているクラスメイトだが、俺の言葉にこの御方がここの長だということが分かったのか正座へと座りなおして頭を下げた。
「あ、あの！俺……！」
　声が震えている。突然のことで心の準備ができていなかったのか何度か言い淀んでいたが、それを長老は落ち着くように諌める。

「君はここに弟子入りしたいんじゃろう。しかし、ここに入るからには途中でやめるということはできない。君には達人というところまで転げ落ちてもらうことになるが、それでもいいのかね？」
　長老から凄まじい威圧感を感じる。俺もここに弟子入りを志願した時も同じような威圧感を感じたが、今では昔以上に威圧感を感じる。ここで修業してきたがゆえにさらに細かく感じ取ることができるようになったのか、それとも気の開放を修めたことによって危険を感じ取っているのか。どちらにせよ、やっぱり長老はすごい御方だ。
　弟子級の中でも最上位に近い場所にいると師匠たちから言われている俺でもそう感じているのに、体を鍛えているだけでは、もしかしたら俺以上に威圧感を感じているかもしれない。現に長老を前にして体が震えているのが見て取れる。けど、その恐怖を飲み込んだのか、覚悟を決めたように表情を引き締めた。
「……あぁ！それぐらいの覚悟がなくちゃ、俺は夢を手にすることができない！どんな修業だろうとなんだろうとやってやる！これは、俺が決めたことなんだ！だから、お願いいします！俺を鍛えてください！」

「……君も、彼らに負けず劣らずの熱血漢のようじゃな」
　そういって長老は笑みを浮かべながら視線を戸のほうへと向ける。そこは閉まってはいるが、きっとその先には最も尊敬する師匠たちが聞き耳でも立てているんだろう。
「君の頼み、聞き入れよう。ようこそ梁山泊へ。君を梁山泊の弟子として迎え入れよう」
　長老の目に適ったのだろう。先ほどまでの威圧感は消え去り、代わりに大樹に寄りかかっているかのような安心感すら感じるものへと変わっていった。
　長老の言葉を理解できたのか、先ほどまでの表情が一転し嬉しそうに顔を輝かせる。
「ありがとうございます！俺は切島鋭児郎といいます！これからよろしくお願いします！」

畳を割りそうな勢いで頭を下げる。話を聞いていた師匠たちはこれを機に戸を開けて次々と部屋に入って、1名天井から降りてきたが、鋭児郎を囲み始めた。

いろいろと思う部分もあるけれど。今日、俺に弟弟子ができた。それを素直に喜ぶことにしようと思う。

いや、喜んでいいのか？俺友達を地獄に送る手助けしてないこれ？え？大丈夫かこれ？

あと長老の気配を感じなかったとして修業がさらにきつくなったのだった。解せぬ。

修行

「……」

「……」

死体が増えた。いや、死体といえば物騒だけど、朝礼もまだ始まる前だというのにすでに机に伏せている男子が2人いた。今まで1人だったのに、休日が明けたら2人に増えていたんだから驚きもするだろう。

「……ちょっと、切島。大丈夫なの？」

1人はいつものことだが、もう1人はこうなること自体が珍しい。いつも元気そうにしているというのに、どうして今日はこんなにもぐったりとしているのか、女子生徒は不安そうに肩をたたく。

「お、おう。あんま触らないでくれ。筋肉痛が……」

「筋肉痛？」

妙なこともあるもんだ、と女子生徒は思った。目の前の少年はもう片方の死んでるのより細いが、それでも筋肉は十分についている。日々トレーニングを欠かさずに行っていることも聞いていたが、この状態からさらに筋肉痛が出るなんて、よっぽど鍛えなければ出ないはずだ。

「筋肉痛って何したの？」

「……修業したらこのザマだよ。鍛え方足んねぇのかなぁ」

修業。男らしさを追及しているならそういうことをしていてもおかしくないが、ここまで精魂尽きるほどまでするのが普通なのだろうか。

きっかけ自体は女子生徒には覚えがあった。かつて同級生が大男に絡まれていた時、自分が動かなきゃダメだったと嘆いていたことは知っていた。後日にそれについての謝罪を受けていたからその胸中は少なくとも知ってはいるつもりだった。

おそらくその時から鍛えようと思っていたのだろう。しかし、たった数日でここまでの状態に普通はならないだろう。このままだと体を壊すんじゃないかと心配になる女子生徒だったが、自分の後ろから

大きな影が差してきたことに気付いた。
「切島、今日は岬越寺師匠のところで検査受けろだとさ。大丈夫だとは思うが、念のため体の状態を確認しておきたいんだと」
「おう、わかった」
　返事を聞いたことで用事は終わったのか、痛い痛いとうめきながら教室を出ていくケンジ。中学生だというのに、すでに１８０を越した身長に服の上からでもわかるほどに盛り上がった筋肉。顔自体は厳つくはないけど獰猛な雰囲気というか、何がと言われたらわからないけど怖い雰囲気が漂っているせいでほとんどの人が寄り付かない。悪い人ではない。切島と意気投合しているのを見るにもっと気持ちのいい人なのかもしれない。でも、あの雰囲気だけは絶対にない。本当に中学生なのか？あれで『無個性』だなんて絶対に嘘ついているでしょ、と思っているのはこの女子生徒だけではなかったのは蛇足だろう。
「……あれ？」
　驚きで若干の思考停止状態となっていた女子生徒だったが、教室から出ていったことでふとさっきの会話で気になる言葉があったことに気が付いた。
「ねぇ、さっきのってどういうこと？」
「……何が？」
「いや、さっきなんとかって師匠に体を見てもらうようにって言ってたからなんでなのかなぁと思って。もしかしてそれ筋肉痛じゃないとか？」
「いや、そういうのじゃない。あいつと同じ場所で体を鍛えてるってだけだよ」
　あいつと同じ場所で。ということはつまり毎朝見かけるような大量のタイヤにチョビ髭のおじさんと石でできたお地蔵様を乗せて走り回るような場所で体を鍛えているということだろうか。
「それ、生きて帰ってこられるの？」
「否定しにくい質問するなよ……。いやあいつよりかはマシなんだけどよ……」

そうして口から出される修業の数々は、もはや拷問と言っても過言ではない、というか拷問だろと声を大にして言いたい内容ばかりだった。スポ根漫画以上の走り込みから始まり、足をくくって燃え盛る火を避けるように前後に体を振り子のように振ったりハムスターが使うような車輪を電気に当たらないように走り続けたり電気が走ってる木でできた等身大人形を起き上がる前に殴り倒し続けたり師匠たちとの組手で何度も倒されたりと、聞けば聞くほど涙が出そうな修業内容に思わず同情すら覚えるほどだった。

「……そりゃ、あぁなるよね。うん」

「俺がやってるのはあいつの半分以下なんだが、それでもかなりキティんだよ。さすが5年もあんな修業してるだけはあるぜ」

「うん。それはあの体を見てたらわかる」

むしろあそこまで鍛えているのに細いままだったらそれはそれでかわいそうな気もしなくはない。いや、修業とは言え、人権？なにそれおいしいの？と素面で言っているようなことをやっているだけでもおかしいとは思うが。

「……まぁ、体壊さないようには気を付けなよ」

「おう。まぁ、あの人たちなら大丈夫だとは思うけどな」

ギチギチと体を動かす切島の表情は、以前のようにどこか追い詰めているようなものではなかったことにホッとする女子生徒だった。

気

さて。わが友が同じ地獄、もとい道場へ弟子入りしてから早くも数か月が経った。いかに体を鍛えているとはいえ、武術に関しては全くの素人であった友人は、畳に寝ころんでいた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「ふぅむ。どうしても個性に頼りがちな行動に出てしまうようだね」

苦しそうに眼を閉じ、肩から呼吸をして、しゃべることすらできていないその様子に、しかしそうした張本人である岬越寺師匠は、手を顎に置いて思案するように少し首を傾げている。

「体を硬化させることができるということは武術において悪いことではない。しかし、君の場合は全身を力ませることで硬くしているから体が動きにくくなっている。これは武術では致命的だ」

体が硬くても許容範囲を超えた、それこそ達人級はおろか妙手の攻撃が直撃すればダメージは受ける。というか達人級からすれば硬さなんてあって無いに等しいものだ。もちろん硬いこと自体に悪いということはないが、武術の世界からすれば受けられる恩恵は少なかったりする。

「だから、必要最低限〝個性〟を使わないように徹底的に体に覚えさせるのがいいようだねぇ」

ヒクリと、友人の頬が引きつるのが見えたような気がした。心なしか岬越寺師匠の目が怪光線を発しているようにも見えたのは、気のせいではないのかもしれない。

「疲労がたまって力が入らない今だからこそ、君にとってもいい修行になる」

だから。さぁ、早く立ちたまえ。

言葉には出していないが、雰囲気がそう語っている。悟ったかのような表情を浮かべ、力の入らない全身を震わせて必死になって立ち上がった。

「よろしく、おねがいしますっ！」

「ふむ。威勢はよし！」

畳に体が叩きつけられる、もはや聞きなれた音が室内に響き渡る。投げ飛ばされた友人は意識はあるのだがもはや起き上がることすら困難なのかフラフラと立ち上がり、また投げられる。
「……はたから見たら拷問だなあれ」
必死な形相で投げられては立ち上がり、投げられては立ち上がる組手を続ける友人に、自分もあれをやっているんだという事実に頬がひきつる。自分でやられていることに何か思うことがないわけではないのだが、こう客観的に物事をとらえてみると中々来るものがある。
「よそ見しているなんて余裕あるね。もっとキツくしてもよかったね？」
「ごめんなさいこれ以上は無理です勘弁してください」
そういう自分も、馬師父との組手で体力の限界まで搾り取られて倒れているところだ。慣れている分、まだ喋れてるだけあっちよりもマシではあるが、立ち上がることもままならず全身が酸素を欲しているのに呼吸だけでは賄えないと言わんばかりに荒い呼吸をしている。
「まったく。試験も近いというのに、このままだと実技試験も落ちてしまうね」
「こんな試験だったら誰も受からないと思うんですけど」
実際師匠たちとの組手が試験だった場合、ほとんどの人が何もできずに帰っていくのが目に見える。弟子級だったとはいえ、あのケンイチさんと美羽さんがやっとの思いでクリアした長老の０．０００２％組手なんてやったら誰も残れないんじゃないんだろうか。
「というか、雄英高校の実技はヒーロー科というだけあって救助の方法とかを見るんじゃないんですかね？」
「荒事も引き受けている職業を目指す学科なのにそれだけで終わるはずないね」
馬師父の言葉に、それもそうかと納得の言葉が出る。そもそもの話職業としてのヒーローとは、救助活動もそうなのだが、大体の子どもがあこがれているのは悪を倒す正義の図だ。それをメインにしているヒーローもいることは事実なのだから、戦闘力が高いことは決して悪いことではない。

「……馬師父、俺の動の気、どうすればいいんですかね」
寝ころんだ状態からやっとのことで座り込むことができた、というだらしない恰好ではあるが、口に出したそれは心の底からの声だった。戦闘、という点では自信がないわけではない。しかし、暴走する動の気という地雷を持っている身としては心の底からどうすればいいものかわからない。馬師父は静の気を扱う達人ではあるが、あらゆる中国拳法の使い手とすら呼ばれている師父に、何度したかわからない質問をする。
「どうすればいいか。難しい質問ね。おいちゃんもいろんな人を見てきたけど、ここまで制御ができない動の気の持ち主は久しぶりね」
少し後悔するような表情で深く息を吐く師父。その表情からその人がどうなったのか察することはできなかったが、よろしくない方向へと転がっていったという考えは、おそらく間違ってはいないだろう。
「まぁ、安心するね。ここにいるのはおいちゃんだけじゃない。逆鬼どんに秋雨どん、アパチャイにしぐれどん、ケンちゃんに美羽、そしてなにより長老もいるね。大船に乗った気分で修行するといいね」
こちらを安心させるように強くうなずいた馬師父。確かにここには会おうと思って会えるものではない達人級、果てには超人すらいる梁山泊にいることができているのだから考えるほどの問題ではないのだろう。というより、どうすればいいのか考えられるほど知識がないというのもあるから考えるだけ無駄な気もしなくはない。
「さて。休憩もいい具合にできただろうし、組手の続きでも始めるね」
帽子を直し、にこやかにそう告げる馬師父。それに俺はあいまいな笑みを浮かべてただこれだけを伝えた。
「馬師父、もうちょっと休憩時間ください」
「疲れ切っている時だからこそつかめる力というものもあるね。だから早く立ちあがるね」
ダメだったちくしょう。

組手

畳の広い部屋の中。その中に柔道着の中に鎖帷子を着込み、カンフーパンツをはいた全く同じ格好をした男が2人、柔道着を着た男性を挟むように向かい合っていた。

「それでは、これから組手を始める。この組手ではケンジ君は気の開放をするように。大丈夫。万が一の時には我々が止める」

その言葉を聞いたケンジの雰囲気が変わった。先ほどまでの静かな空気は消え、代わりに獰猛さがケンジから発せられているように塗りつぶされていく。

そのあまりの変わりように見学していた切島は驚きで表情を変えた。学校でも独特すぎる雰囲気のせいでほかのクラスメイトからも敬遠されているが、今のケンジはそれ以上に近寄りがたいものがあると感じていた。

その一方で師であるケンイチはケンジとは真逆だった。ケンイチは気配を自然に流しているかのような、まるで川の流れのように穏やかで静かだった。

「……行きます！」

ケンジのその声がスタートとなり、ケンジがコマ送りをしたかと思うほどに素早くケンイチへと近づき、渾身の蹴りをケンイチへ叩き込んだ。

「カァッ！」

拳、足、手刀、足刀、肘、膝。師匠たちに教わったありとあらゆる技をケンイチに叩き込んでいくが、どれも紙一重でいなされ、かわされ、受け止められる。まるで水にでも殴りかかっているかのように手ごたえらしい手ごたえはない。しかし、そんな中であってもケンジにあったのは歓喜だった。

あこがれの人が強い。その事実は師弟となった者、あるいは憧れがある者からすれば喜びに等しいものだと、改めてケンジは感じた。だから、ぶつけていく。自分の出せる全力をもって、目の前の巨大な壁にぶつかっていく。

「ふむ。まだ動の気を完全には開放しきれないとはいえ、まずまずのようだね」
「へっ。まだまだ甘いがな。なんだあの猛羅総拳突きは。全然なってねぇじゃねぇか」
「そんな嬉しそうな表情で言っても説得力ないね逆鬼どん」
「アパー!ティー・ソーク・トロンはもっと鋭くするよ!」
「……いつか剣術も教える……ぞ」
「まだあきらめてなかったのですのね……」
　組手の様子に一様に反応を出す師匠たちだったが、組手の様子を見ていた切島はただ茫然として見ていることしかできなかった。
「……すごい」
　嵐のような攻防を目の当たりにした切島は、自分があそこに行くことができるのかという不安がよぎる。
「鋭児郎くんや」
　その不安も読み取ったのか、長老が切島に声をかける。
「この組手はいつか君も訪れる道じゃ。君には才能がある。しかし、同時に彼にも才能がある。君が進めば彼はもっと先に進んでいる。それが君と彼の打ち込んできた時間の差じゃ。じゃが、これだけは忘れてはならんぞ。君が通る道は彼らが通ってきた道じゃ」
「……はい」
　肩を叩かれ、目の前の組手を目に焼き付けるようにじっと見つめる。羨望もあったが、同時に自分もあそこに立ち、自分の憧れの人に近づくんだという決意を改にした。
　一方で、ケンジと組手を行っているケンイチは、目の前の少年に対して自分にはない才能を称賛していた。
　自分とは違って才能がある。師匠たちからそういわれ続けて、現に自分ではありえなかったほどに凄まじい速度で成長している。……もっとも、自分が妙手だったときから同じ修業をしてきたせいか本人はあまり自覚がないみたいだが。かつて自分が通ってきた道とはいえ、自分の弟弟子であり弟子でもある彼に羨ましいとすら感じる。
「……さすがです、ケンイチさん」

お互いの制空圏から離れた場所でケンジは肩で息をしながら称賛する。しかし、一方のケンイチは息を切らせている様子はなく、むしろ体が温まってきたという程度。才能があろうがなかろうが、弟子級と達人級の差というのはそれほどの差があるというのを、ケンジは改めて感じた。

「君のほうがすごいよ。やっぱり僕とは違って才能があるんだって思う」

「……こうもあっさりとあしらわれてたら皮肉にしか聞こえないですけどね」

ケンイチの言葉は本心からの言葉だろう。確かに今の状況は子供（弟子級）のことを簡単にあしらう大人（達人級）だ。それがわかっているから、ケンジはこのような場以外では絶対に使うなと言われているものを開放した。

「……っ！」

見たことのない、感じたことのない威圧感を受けた切島は息が詰まった。クラスメイトの見たこともない様子に恐れすら感じたが、周りの人たちは慣れているのか特に反応もなく観戦を続けていた。

「イきまス！」

先ほどよりも鈍く、しかし強い音が室内に響いた。

「ガアアアアアアア！」

先ほどよりもさらに激しい、弟子級ではとてもさばききれないほどの猛攻がケンイチを襲う。上から、下から、右から左から正面から後ろから手刀拳足膝肘腰胸投げありとあらゆる方向ありとあらゆる技からの猛攻は、しかし達人級へとなったケンイチにとっては余裕をもって受け流せる程度のものだった。

ケンジが攻めてケンイチが受け流すしばらくそれが続いていた中、ケンジの目が倒す、という意思がいつしか殺す、という危険な光へと変化していき、ケンイチを見た。

「っ！」

それを見たケンイチは即座にケンジの腕をつかみ床にたたきつける。ケンジもすぐに体制を整えようと動くが、即座に動けないように抑え込まれて動くことができない。

獣の唸るような声がしばらく室内に響いたが、しばらくすると唸り声も収まっていき、荒かった呼吸が整いつつあった。
「……すいません。またやってしまいました」
「大丈夫だよ。けど、まだ動の気は暴走するみたいだね」
ケンイチの言葉にケンジの表情が落ちる。修業で使って慣らしていく必要があるが、ケンジの場合は動の気を使うと暴走してしまうことが多々ある。
ケンジとて努力をしていないわけではない。むしろ動の気を扱う逆鬼やアパチャイに熱心に指導してもらっているほどに克服しようと必死に努力している。しかし、そうであってもマシになりつつあるという状況になっていくだけで、完全に制御ができると言えるようになるのがいつになるのか、本人にはわからなかった。
畳の上で少し呆然としながら寝そべっていると、組手を終えたことで審判をしていた岬越寺が少し渋いような表情をしていた。
「君は動の気が常人よりも濃く出る人間だ。はっきり言ってこれは才能だ。完全に動の気を開放し、掌握すれば妙手の中でも達人に近い能力にはなるだろう。しかし、あくまで能力だけであり技術や心は今のままだから妙手が相手でも負けるだろう。なにより、動の気を使いこなせないのなら宝の持ち腐れだ」
言い聞かせるように言った言葉はケンジも分かっていることだ。師匠全員から何度も言われているが、わかっていることなのだがどうしても改善することができない。自分でもどうすればいいのかわからないというのがケンジの正直な思いだった。
同時に、ケンイチの脳裏に浮かぶのはまだ弟子となって1年も経っていない時に出会った、緒方の弟子育成プログラムの1つであったラグナレクにいたバーサーカーと呼ばれていた男。彼は動の気がありすぎて開放してしまうと理性がほとんど働かなくなってしまうほどだった。ケンジはまさにそれに近い状態にあるのだが、決定的な違いは彼の在り方と動の気の量にあった。
「確かに動の気は扱いが難しい。扱いを間違えると理性を失い、ただ破壊を求めるだけの獣になってしまう。そんなことを我々が見逃す

はずもなく、君もそれをわかっているのは承知の上だ。しかし、これだけは耳にタコができようとも言い続けなければならない。君のそれは、容易に人を捨て去ることのできる危険な爆弾であると」
バーサーカーとは違い、ケンジは活人拳。倒すことはしても殺人拳のように人を殺すことを是としない一派だ。そうでなければ梁山泊にいることはできない。
しかし、それをすべて台無しにしてしまうのがケンジの持つバーサーカーすら超える動の気の量だ。完全開放をしなくても、ある一定のところまで動の気を開放してしまえばあとは総崩れ。かつて梁山泊に弟子入りしようとし、一影九拳に所属している緒方一神斎のように修羅道に落ちるわけではないが、理性を失った獣になってしまう。
今でこそ梁山泊の特A級の達人たち、そして達人の上に存在する超人に修行を見てもらっている。こんな人たちに見てもらえること自体すべての運を使い切ったといっても過言ではないほどの幸運、修業内容のことはさておき、であるのは間違いない。このまま出会うことがなければそうなっていた可能性が大いにあった。
「しかし、同時に君の動の気の制御は妙手へと至るための必要なことだ。それができない今、どう頑張っても弟子級から脱することはまず不可能だ」
ケンジはまだ妙手に入るほどの技術はない。弟子級としては上位にいることは間違いないが、それでも妙手に行くまでまだ数歩足りていない。しかし、妙手へと歩むための一歩をまだ出せていないこともあって現状から抜け出せていない。
「なに。動の気をコントロールできる精神力を鍛え上げればいいだけの話さ。ケンイチくんは静の気だったからこういったことはなかったが、なに、問題はないさ。弟子は実験体ともいうからね」
「ちょっと待ってください師匠。待って。今不吉な言葉が聞こえたんですけど？」
「まずは暴走するかしないかのギリギリまで動の気を解放させて組手を続けようか。なに。暴走したらすぐに戻してあげるさ」
「俺朝日拝めるのかなーはっはっは」

修行の方針が決まったからか逆鬼たちが修業をつける順番をやいのやいのと嬉々として決めている中ケンジの声はむなしく騒ぎの中に消えていった。聞こえていたケンイチは苦笑紛れにがんばれ、とだけ肩をたたき、それがケンジの肩をさらに落とすこととなったことを、切島は頬をひくつかせてみていた。